

自著紹介

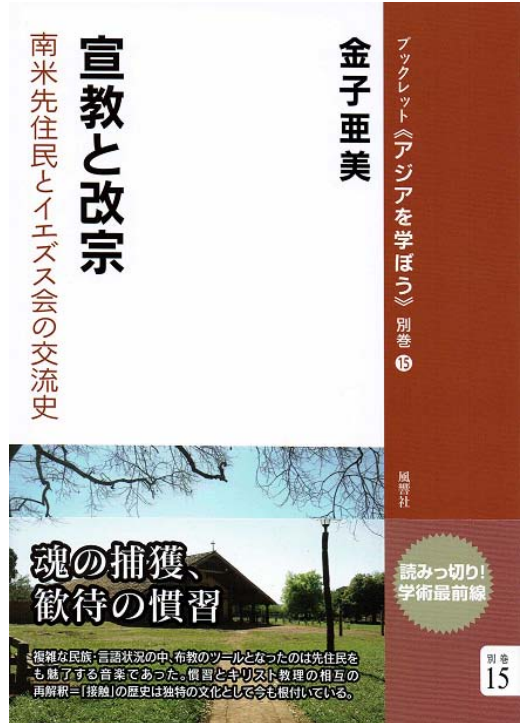
『宣教と改宗—南米先住民とイエズス会の交流史』（風響社、2018年） 宇都宮大学・金子亜美

はじめに

本書は、スペイン領南米のイエズス会布教区を舞台に、先住民と宣教師の接触および交流の歴史、そしてその長期的な帰結の一端を描こうと試みたものである。

植民地時代、現地人の魂の救済をうたうカトリック宣教は、諸帝国の版図拡大において重要な位置付けを与えられていた。スペイン領南米での先住民への宣教は、現地社会の軍事制圧による植民地支配が確立しつつある16世紀以降、公式事業の一つとして展開した。その際、ドミニコ会やフランシスコ会、聖アウグスティヌス会、イエズス会などの修道会が各地で実際の宣教活動に従事した。とりわけ17世紀以降、行政の中心から遠く離れた地へと征服の前線を進めるにあたり、これら修道会は「布教区 *misión*」と呼ばれる先住民のための居住区を設立し、そこで宣教のみならず各地方での世俗的な役割も担うようになった。

本書で扱ったのは、南米大陸の中心部、今日のボリビア東部低地に位置するチキトス地方における、イエズス会布教区の歴史と現状である。当地では、17世紀から18世紀にかけてイエズス会士が10箇所の布教区を築き、周辺に暮らす多民族・多言語の集団のキリスト教化に尽力した。当地に関して言及している日本語の研究には、スペイン領南米植民地における集住化政策やキリスト教美術に関する齋藤晃氏や岡田裕成氏らの網羅的な研究などがある。それらを念頭に置



きつつ、筆者をはじめ関連分野の研究者が今後参照できると概説的な書籍となることを目指し、本書を執筆した。また、今日の当地の人々自身による歴史の語りや冒頭と末尾に配することで、すでにスペイン語で豊富になされてきた歴史記述と、筆者が行なった民族誌的調査を対話させようとするささやかな試みでもあった。

出版の経緯

本書は、風響社の「ブックレット《アジアを学ぼう》」シリーズの別冊15巻として、2018年10月に出版された。このシリーズは、筆者がスカラシップ生として助成を受けた松下幸之助記念財団が、スカラシップ終了生を対象として支援している成果発表の機会である。このシリーズについては、本誌22号で笛田千容氏が、23号で宇田川彩氏が、自著書紹介において詳しく

述べている。シリーズ名が《アジアを学ぼう》であるのは、スカラシップがもともとアジア地域を対象としていたためである。今日では中近東やアフリカ、中南米にまで助成範囲が拡大している。特に中南米に関する研究を志す多くの大学院生にとって、このスカラシップは魅力的な選択肢となっている。

2013年、博士課程に進学しチキトス地方での民族誌的調査を希望していた筆者は、同財団からスカラシップ生として認定を受けた。認定式では、財団の方々や終了生、そして同期のスカラシップ生と知己を得た。その時から1年ないし2年、スカラシップ生はそれぞれ世界各地で研究をおこなう。しかし帰国後にもフォーラムでの研究発表やブックレット執筆時など、スカラシップ生と再会するチャンスがある。そうした機会は筆者にとって大きな楽しみとなっている。

筆者がチキトス地方に滞在したのは2014年から2016年にかけてである。大学院では文化人類学を学んでおり、この留学はもっぱらキリスト教儀礼に関する民族誌的調査になるはずであった。事実筆者が行なったのは、守護聖者祭への参与観察や儀礼的発話の書き取り、それらの出来事に対する聞き取りが中心であったが、他方でチキトス地方について知れば知るほど、その歴史とそれをとどめた豊富な史料、そしてすでになされてきた歴史学的研究の重要性を認識していった。また現地の人々自身が、儀礼に関する語りのなかでしばしばイエズス会時代に言及し、そこにルーツを持つとされる儀礼的発話や音楽などの遺産について語ることが目引いたのである。

昨今チキトス地方のエスノヒストリーを著した若き歴史学者セシリア・マルティネスによれば、チキトス地方はその中間的な性格ゆえにこ

れまで研究者の関心をほとんど引かなかったという。というのも上記の状況からも推し量られるように、彼らは「良きキリスト教徒」、いわば真正な文化を失ってしまった面白みに欠ける対象であり、特に他者性の強い対象を志向しがちな人類学者の興味を引かなかったのである。かと思えば近年、彼らの「良きキリスト教徒」としての外面に覆い隠された「真の土着性」を探し当てようとするブラジル人人類学者をはじめとする研究が出てきているのは、同じ状況の裏返しとも言えるだろう。

しかしながら、少なくとも筆者が住み込んだ旧布教区であるサン・イグナシオ市やサンタ・アナ村で熱心に行われている数々のキリスト教儀礼を見るにつけ、それを土着文化との決裂とみなすことも、逆に土着の感性によるキリスト教的記号の流用とみなすことも、賢明とは言えないと考えるようになった。当地は確かに、キリスト教化という大いなる文化的断絶を経験したが、しかしその断絶の上に、新たなアイデンティティが受胎しているのである。確かに今日のチキトス地方のキリスト教儀礼には土着的要素も見られるが、それはつねにすでにキリスト教性をも同時に帯びているのであって、いずれも両者それぞれを記述することを通してしか十全に捉えることはできない。こうした地域の研究にとって、歴史記述と民族誌的記述を接続することは理にかなったアプローチである。イエズス会士と先住民の接触、そして双方が互いに自己と他者の要素を取り込みながら近づいていった双方向的な交渉の過程こそ、「キリスト教化という断絶」と「真正なる土着性」の中間にある現状を形成しているからである。

ブックレットの執筆にあたり、風響社の石井社長から「参考文献も注もオチもなくてよい。4~6万字でわかりやすく、多くの人に届くよう

に、好きなことを自由に書いてよい」と伺った。そこで、もっぱら文化人類学を学んできた筆者であったが、キリスト教化の歴史と、それが今日人々にいかに語られるかの概説に挑戦することにした。それに成功しているかといえば、特に歴史記述の面に課題が多々残されていると言わざるを得ない。今後のさらなる研究の発展につながるたたき台として、筆者自身批判的に利用していきたいと考えている。

### 執筆について

本書は、2017年12月から2018年3月にかけて、風響社で開かれた3回のミーティングを通して執筆された。同期執筆者は50巻の藤音晃明さん、51巻の白石奈津子さん、別冊14巻の白杵悠さんだった。藤音晃明さんはスカラシップ同期で、最終ミーティングで全文精読してのコメントを互いにした。白石さんと白杵さんも前年の松下フォーラムで一緒に研究発表をした同世代の研究者で、心強かった。筆者にとってミーティングは、孤独な研究生活の中で励まし合える仲間を得た貴重な機会だった。

表紙には旧布教区サンタ・アナ村の教会の写真を、裏表紙にはそこでヴァイオリンを演奏する先住民音楽家の写真を選んだ。もともと表紙は、サン・イグナシオ市のある教会に飾られている宗教画「十字架の道行き」の第7留、「ヴェロニカ、イエスの顔を拭く」にしようと考えていた。このヴェロニカは当地の民族衣装を着ており、自分たちがイエス・キリスト生誕の瞬間に立ち会っていたかのような歴史観が、本書の冒頭と末尾で紹介した歴史語りと似ていたからである。しかしタイトな日程のなかで著作権の問題をクリアできているか確認できなかったため、使用を控えることにした。

また書名についても、石井社長と緊張感のあ

るやりとりをした。筆者は長々とした説明的な書名を提案したのだが、商業出版とのことで、幅広い読者をとらえる書名を考案しなければならない旨ご意見をいただいた。そうして何度かのメールのやりとりの末、現状の書名に落ち着いた。今でも書名や帯で大風呂敷を広げすぎではと心配になるが、しかし自分一人ではできない本作りの醍醐味を味わうことができたのは得難い経験だった。

### 出版後の反響と今後の展望

本書の出版に際して、風響社から原本を多数頂戴した。そこで草稿にコメントをいただいた先生方や、お世話になっている研究者の皆様にご呈した。また出版と同じ2018年10月には宇都宮大学に就職したため、名刺代わりに同じ国際学部の先生方にお渡ししている。すると、17世紀フランス思想史の専門家から貴重なご意見を頂戴し、17世紀ドイツ文学の専門家からはキリスト教思想史に関する最新のご共著を拝受した。このように本書は、幅広い関心を持つ多様な人々とつながる貴重な契機となっている。

今後は博士論文の提出を控えているため、先に述べたように歴史記述の訓練に取り組み、民族誌的記述とのより説得的な接合を目指していきたい。また、本書の執筆に至るまでには様々な分野の研究者との対話があったことを忘れず、自身も研究者コミュニティに対して貢献を果たしていければと考えている。本年度より松下幸之助スカラシップフォーラムの世話役であるフォーラム委員に任命されたこともあり、これからは次世代の成果発表やブックレット執筆をサポートする側となる。様々な分野を尊重し対話に励むことの大切さを日々実感しつつ、その楽しみを共有していければと思う。 ■